

## 黒毛和種繁殖牛農家における放牧および草地管理について

中島良文・内村利美

研修地 大分県大分郡湯布院町

日 程 1995年3月23日～3月24日

研修した農家の経営規模は、繁殖牛35頭と育成および子牛が24頭で、採草地および放牧地は5.4ha、労働力は父母、長男夫婦の4名であった。

研修で得た特記すべきことは、次のような事項であった。

- 1 草地は混播牧草を栽培し、1番草を収穫して、その後に放牧を行っていた。
- 2 傾斜地は野草（ススキ）地として残しており、牧草の収穫時に放牧に利用していた。
- 3 春季から秋季の間に放牧する牛は放牧地が畜舎より遠方にあるため、放牧地へは1人で3～4頭を引いて移動していた。
- 4 子牛の育成には優秀な種牡牛の精液を選び人工授精を行っていた。
- 5 母牛は血統の優秀な牛をそろえ、生産された子牛は市場出荷を行い、高い評価を得ていた。1994年度には平均価格が50～60万円位で、高価格で販売していた。
- 6 子牛の育成では下痢を発生させないようにするため、環境対策に力を入れていた。このため、畜舎内は清潔にされ、子牛に糞はついていなかった。
- 7 畜舎内では糞と尿を分離して処理しているため、糞尿は消臭されていた。

研修地の農家周辺は人家が密集しているため、糞尿の垂れ流しや野積によるハエの発生等畜産公害を出さないということが重要であり、公害に対して十分な注意を払っていると思われた。